

平成25年が動き出し、睦月(むつき)も下旬になろうとしています。

陰暦1月の異称である睦月の由来には、稲の実を初めて水に浸す月で「実月(むつき)」が転じたとする説や草木が萌え出る「萌月(もゆつき)」など諸説がありますが、有力なのは、親族一同が集い宴をする「睦び月(むつびつき)」の意であるとするもののようです。

梅や桃の香りもまだですし、もちろん桜もまだまだ先ですが、何故か福島県は(大袈裟に言えば日本列島が)年の初めから「桜」一色に染められている感があります。テレビも新聞もこぞってNHKの大河ドラマ「八重の桜」や「新島八重」、そして八重の出身地である会津若松市や福島県関連の様々な話題を取り上げています。

和歌の世界では「花」といえば桜のこととされ、日本人にとって最もなじみ深い「桜」という言葉を聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか。

文字通り胸を膨らませて通った小学校の桜、唱歌の一節「さくらさくら、野山も里も」、高校に入学した頃の桜、歌人西行が愛した桜、山奥で人知れずひっそりと咲く桜、川堤に何キロにもわたって咲き連なる桜、城跡の昔を偲ばせる桜、千年近い時の流れを感じさせる枝垂れ桜、朝河貫一賞に縁のある朝河桜(英和辞典を暗記して覚えるたびに一枚一枚破って食べ、最後に残った羊皮の表紙をその根元に埋めたと伝えられる桜)、日本の国花であり百円硬貨の表のデザインとなっている八重桜、等々、人によって、心浮き立つ思い出からもの悲しい思い出まで、たくさんのエピソードを持っていることでしょう。

私も年齢と共に桜にまつわる様々な思い出を増やしてきましたが、詩人大岡信さんのエッセイ「言葉の力」(*)で知った、人間国宝で京都の嵯峨に住む染織家志村ふくみさんの桜の色の話がとても好きです。(中学校や高校の国語の教科書にも採られているので、読んだことのある方も多いのではないのでしょうか。)

淡く、しかも燃えるような強さを内に秘め、華やかでしかも落ち着いた桜色に染まった糸で志村さんが織った着物を見て、大岡さんは桜の花びらを煮詰めて色をとったものと思ったのですが、実際は、桜の花が咲く直前に、山の桜の皮をもらってきて染めたのだと志村さんは言います。木全体で懸命に最上のピンク色になろうとする姿が大岡さんの脳裏に浮かび、体が一瞬揺らぐような不思議な感じに襲われます。花びらのピンクは、幹、樹皮、そして樹液のピンクであり、桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはそれらのピンクが尖端だけ姿を出したもののものにすぎなかったのです。私たちには、桜の花のピンクしか見えないのですが、まさに樹全体の活動の精髓(エッセンス)が、桜の花びらという一つの現象となるにすぎないことを志村さんは見せてくれたのでした。

そして大岡さんは、言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚と同じだと言います。言葉一語一語の花びらは、全身でその花びらの色を生み出している大きな幹を、その背後に背負っているのだと。そう考えると、一語一語のささやかな言葉の、ささやかさそのものの大きな意味が実感され、それが「言葉の力」の端的な証明であろうと思われる、とエッセイは結ばれます。(**)

「言葉の力」(*)『詩・ことば・人間』(講談社学術文庫)所収

(**) 中学校の教科書では、「美しい言葉、正しい言葉というもの、そのときはじめて私たちの身近なものになるだろう。」と結んでいます。

今回、改めて大岡さんの文章を読み直すうちに、桜の花びらは、学校で様々なことを学び、自分の夢を見つけて、志を高く掲げ、夢の実現に向かって努力を続けた子どもたちの「夢と志の結晶」なのではないか、と感じました。それは、高校を卒業する段階でしっかりした形を成しているものもあるだろうし、大学を終える頃にやっと形が見えてくる場合もあり、結晶の成長の速度は一人ひとり違っていることでしょう。その個人差をしっかりと見極めながら、いつの日か花びらという夢と志の結晶を形作するために必要な、真っ青な空に向かって伸び続ける幹と、どのような場所にあっても花びらに栄養を確実に送り続けるたくましく根付く根つ子を、そして、何としてもそれぞれの花を咲かせようとする意思を持つ樹木を育むことが我々教師の仕事ではないのか。目に見える「夢と志の結晶」と、その背後に在る見えにくい人間性。子どもたちが、夢を見出し、志を高く掲げて懸命に空に伸びようとする、その傍らで、共に自らを高めながら、時には叱り、時には励まし、見えにくい背後に在るものを強く堅固なものとし、子どもたちが自らの力で空を目指すようにする、それこそが教師の仕事なのだと考えます。

私は今、「共に自らを高めながら」と書きました。この「共に」という言葉は、現在の第6次総合教育計画の土台となっている第5次福島県長期総合教育計画～新世紀ふくしまの学び・2010～の策定に私自身が関わって以来、私の教育理念の底に流れ続ける通奏低音のようなものです。「共生と自立」を基本理念とし、「人・地域・自然と共に個を磨く新世紀ふくしまの教育」を基本目標に掲げた第5次長期総合教育計画は、第6次福島県総合教育計画の基本理念である「“ふくしまの和”で奏でる、こころ豊かなたくましい人づくり」に受け継がれているのです。“ふくしまの和”は、自立した個と個が共に作り上げるハーモニーなのです。

私は学校で教師と生徒たちに、次のように繰り返し語りかけてきました。

「共にする」ということは、非常に大切なこと。それは、場所や時間、方言などの言葉、そして記憶を共にする、共有するということであり、ある時ある場所で大勢の仲間と巡り逢い、共に学校生活を送るということほど貴重な財産はない。

私たちが同じ場所に集う、出会うということは、まさに奇跡的な出会いであり、東京でもない、大阪でもない、ここ福島県の〇〇の地で、そして平成〇〇年という年に、同級生、先輩や後輩、先生たちと巡り会ったのは奇跡そのもの。この邂逅(めぐりあい)を何よりも大切にしてほしい。

この思いは、今も変わりませんし、これからも語りかけていきたいと考えています。

この思いを胸に抱き、一週間前からあまり変わらない雪景色を眺め、この福島県で、大震災から二年目を迎えるこの時を共に生きる私たちみんなに、そして掛け替えのないこの地球上で懸命に花を咲かせようとしている全ての人々に、睦び月(むつびつき)に降り積もる雪のように善いことが一つ一つ重なっていくことを祈りながら、「万葉集」中で最も

新しい歌とされる大伴家持の歌でこの稿を閉じます。

新(あらた)しき年の始めの初春の

今日降る雪のいや重(し)け吉事(よごと)